

# CIEC 第 72 回研究会 報告

「いまの高校での情報教育と大学入学後の情報リテラシー教育をつなぐもの  
～教科「情報」を履修した高校生・大学生、情報倫理教育のありかた～

日時	2007年12月22日(土) 14:00～18:00
会場	大学生協杉並会館 2F 201, 202, 203 会議室
講演者	辰己 丈夫(東京農工大学 総合情報メディアセンター准教授)
報告者	大橋 真也(千葉県立東葛飾高等学校/CIEC 小中高生部会世話人)
参加	25名

まず始めに、小中高部会から、2007年度高等学校教科「情報」履修状況調査の集計結果の報告を行いました。全国47の大学・短大の協力を得て、大学1年生10,146名から回答をいただきました。詳しくは、コンピュータ&エデュケーション Vol.23(2007年12月発行)をご覧ください。

本調査は、今回が2年目となりますが、昨年の反省をふまえ、質問項目を一部変更したこと、Webでの調査を取り入れたことなどで、単純に比較できない側面はありますが、来年度以降も調査を継続していく基礎づくりができました。

調査項目は、大学入学以前のコンピュータ利用歴、教科「情報」の履修状況、情報教育の各項目(ワープロ操作、Web検索、メディアリテラシーなど17項目)について、それぞれ3つの質問((1)高校の授業で学習したか、(2)現在自分が理解し活用できるか、(3)今後大学でさらに学びたいか)、そして教科「情報」に対する意識(役に立つか、必要か、楽しかったか等)などです。

今回対象の学生は、現役・1浪が教科「情報」を履修した世代にあたり、2浪以上は未履修の世代となります。

今回の調査で分かったことは、おもに以下のようなことです。

- ・ コンピュータやインターネットの利用歴と、情報教育の各項目の活用・理解と大きな連関がある。
- ・ 理解・活用の高い項目は、高校までで学んだ割合が高いものとの関係があり、そのようなものに関しては、大学で学びたい割合は低くなっている。
- ・ 現役と浪人では教科「情報」を楽しいと感じた割合は、現役のほうが高い。

現在各高校で実施されている教科「情報」は教科書の内容もふくめ学校ごとに内容のばらつきがあり、学習指導要領とかけ離れているものもあります。(その典型が一昨年度末の未履修問題)今後、高校での教科「情報」が本来のものになるに従い、高校入学以前の小・中学校、卒業後の大学との情報教育の連続性を作り上げていくための研究がさらに必要になっていくと予想されます。

そのため、小中高部会では次年度以降も調査を継続していく予定です。

次に、2007PCカンファレンスのシンポジウム2で一部紹介した、高校生と大学生の座談会のビデオを約1時間上映しました。PCカンファレンスで「ビデオをもっと見たい」との要望があったためです。

この座談会は北大PCマスターズの武内さんが司会を務め、3つの高校の8人の高校生と、大学でパソコン講座の講師を務めている2大学の大学生5名が参加しました。大学生は全員高校で教科「情報」を履修していない世代であったこと、高校生は情報教育に特色のある高校から参加したことから、非常に特徴のあるものとなりました。

高校生と大学生の間では、「情報」の履修経験はもちろんのこと、「情報」を含む中学高校の授業での体験、PC 使用歴そのものにも大きな隔たりがあり、参加した大学生自身が“ジェネレーションギャップ”と表現したものが僅か2,3年の差で生まれていること、一方で家庭ではメール、SNS、ネット検索など使い方に大きな違いが見られないことも特徴であったことが報告されました。また高校生自身によるあるべき「情報」について、すでに厳然としてあるスキルの差によって、より多くを学びたい生徒のためにはレベル別の授業が必要ではないかという提言やその反論がされたこと、大学生から高校生に向けてメールマナーや情報倫理の問題について言及されたこと、さらに高校生からは(年配の)大人たちへの教育こそが不足しており個人情報保護の問題など重大な問題につながるのではないかという指摘もありました。

座談会の参加者から、「もっと普通の高校生の話が聞いてみたい」との感想もあり、研究会の感想文のなかにも、「参加した高校生が一般的ではないのでは」というご意見もいただきましたが、高校生、大学生が生の声を直接聞け、交流できる場面は少ないこと、今後の「情報教育世代」の高校生を考えると有意義なものでした。

それらをうけて、東京農工大の辰巳先生から講演をいただきました。

前半は、「高校での情報教育と大学入学後の情報リテラシー教育」というテーマでまず講演をいただき、後半に「情報倫理教育ビデオ」の狙いと内容についてのご報告をいただきました。

前半の、「高校での情報教育と大学入学後の情報リテラシー教育」のなかでは、大きく2点のことが話されました。

1 点目は、情報格差と経済格差の「負のスパイラル」についてです。携帯電話が手軽な高機能なコミュニケーションツールとして広がる一方で、携帯電話しか使わない層と、パソコンも使う層の格差について話されました。たとえばアルバイトでは、携帯で募集しているもののほうが、パソコンで募集しているものよりも賃金が安いなど。また、自宅にパソコンを持っているか、持っていないかで、高校の教科「情報」の成績には有意差があることもわかりました。情報格差が経済格差を生み出し、さらに情報格差につながる「負のスパイラル」があるということです。この格差をなくすことが学習指導要領に基づく教育であり、教科「情報」ということになります。

2 点目は、その教科「情報」の実態についてです。問題になった、教科「情報」未履修の問題は実態としてあり、その場合高校の卒業証書の信頼性の問題、大学の入試科目の増加など、逆に高校側にとって不幸な結果になります。教科「情報」の内容について、高校によっては特定のソフトの操作技能に偏っている場合などもあり、大学の情報の授業の中では、他のソフトの使用に抵抗が出たりもします。

未履修をなくすこと、教科「情報」の内容について、精査することが必要です。

後半では、「情報倫理デジタルビデオ教材」の、最新版の Part.3 について紹介がありました。今研究会が最初のお披露目で、以下のような特徴があります。

1) 30 テーマのクリップ(大学生協版は 20 クリップ)

Part.1 の 9 クリップ、Part.2 の 20 クリップから、時代に合わせたはやりのテーマ(暴露ウイルス、SNS など)を加えバージョンアップしている。

2) 外国語版の作成を当初から想定している。

Part.2 では日本語版に後からテロップのみ挿入した。(英語版、韓国語版)

このほかにも、画面キャプチャを最新の OS に変更する、ナレーターや俳優を増やすなど、工夫を凝らしています。

その後、会場からの質問に答え、大学の入学時のオリエンテーションや、講義での活用事例の紹介と、いくつかのクリップを上映がありました。

<<まとめにかえて>>

教科「情報」を履修した高校生が大学に入ってくる「2006 年問題」では、2007 年度に 2 回目の新生を迎えました。PC カンファレンスのシンポジウム2では、それにまつわるさまざまな意見が出されました。今回の研究会では、シンポジウムの補足となる報告と講演を行うことができました。ただし、参加者が少なかったこともあり、シンポジウム同様、2006 年度問題にまつわる諸課題を深めるには至っていません。

PC カンファレンスのまとめの繰り返しとなりますが、今後、「高校と大学」「中学と高校」といった階層ごとの違いと連携をテーマに、あるいは「携帯電話と情報教育」「一般教科と ICT」「“体験”と“スキル”」「情報活用スキルと生きる力」等々階層を越えてともに考えるテーマを設定し、ますますたくさんの交流・研究の場面をつくっていきます。

以上

(文責:石原裕)